

太平洋人物誌

小嶺磯吉

ラバウル開拓の先覚者

(一八六六年—一九三四年)

一、小嶺磯吉の生涯

小嶺磯吉は一八六六年(慶応二)に肥前島原の堂崎(現在の長崎県南高来郡有家町堂崎池田)で生まれた。一六歳の時に小嶺は志を抱いて韓国にわたり仁川の海軍御用達福島屋に奉公したが、その後、南方への発展を思い立ちオーストラリアに渡航し、木曜島で真珠業に従事するかたわらニューギニア西部と南部を探検し、一時帰国した。再びニューギニア(イギリス領)に渡り澱粉製造の日豪貿易会社の設立を企てたが、失敗して帰国した。

しかし、陸軍の大御所である川上操六大将から「南洋には未だ領土の確定せぬ島もある。行ってこれを樹てたまえ」と日章旗を渡されて、明治三四年(一九〇一)年に再び渡航し、サブラ号、パプア号の二隻のスクーナー(各一〇トン)でニューギニアのドイツ領(北部と東部)を探検したが初期の目的は達成できなかった。

当時はドイツが太平洋方面への植民を開始して間もない時期であり、小嶺はヘルバーツホーへ(現在のココポ)に本拠を置くドイツ総督ドクター・ハールに委託されて、現地民の鎮圧と討伐任務を引き受けた。

しかし、明治三十七年(一九〇四)年に日露戦争が勃発すると、ドイツ人の対日感情が悪化したため、小嶺は職を辞してアドミラルティー諸島のマヌス島に五〇〇町歩の土地を租借し、椰子栽培事業を始めるとともにラバウルに小嶺造船所を建設した。

小嶺はラバウルを中心とした日本人の発展を画策し、明治四五(一九二二)年には神戸にドイツ・ニューギニア小嶺商会を設立し、造船移民の募集や日用品の輸入をはかり、同年五月から翌年一九一三年四月までに約一五〇人の移民を迎えた。

小嶺は海軍の上村彦之丞大將、財界では松方幸次郎、辻新次郎、大倉喜八郎などの援助を受け、今後の投資や発

展を目指して一九一四年には辻太郎一行の視察団をニューギニアに迎えた。しかし、視察団が帰国した八月には第一次世界大戦が勃発し開発計画は挫折してしまった。

小嶺は第一次世界大戦中はオーストラリア官憲に協力し、後述する功績を上げた。このために、大戦後にオーストラリアは日本移民に関して厳しい制限を加えたが、小嶺については小嶺の会社が従来雇用していた六〇名を限度として移民を認めるなどの便宜を与えていた。小嶺はその一方で、椰子の栽培計画を立て五〇〇町歩を租借し、一九二一年までに一〇〇〇町歩に椰子を植え付けたほか、造船業・水産業等事業を拡大した。

しかし、大戦後の世界的不況に見舞われ、さらに事業半ばの昭和九(一九三四)年一〇月三日に食中毒を起こして死亡してしまった。葬儀には多数の参列者が参列し盛大に行われ、棺は日豪の国旗で覆われていたという。享年六九歳であった。

また、遺骨は蝶子夫人により日本に持ち帰られたが、ラバウル在住の日本人および現地妻の強い懇願により、分骨が翌昭和一〇年七月一五日に横浜を出港した南洋貿易会社の定期船「平栄丸」船長菊地清雄によってラバウルに届けられたという。

二、第一次世界大戦と小嶺

第一次世界大戦が勃発した一九一四年は、五〇年ぶりの旱魃から原住民餓死するほどで、ドイツ政庁所住地バウルをはじめドイツ領ニューギニアは混乱に見舞われ治安が悪化した。そのため小嶺は邦人と現地人からなる五〇〇名の自警団を組織し、在留邦人や各国民の生命財産の保護に努めていた。大戦が勃発するとドイツ官憲に小嶺造船所は接収された。

しかし、小嶺のそれまでの総督との関係から接収が解除され平常通りの活動が認められたが、その一カ月後の九月一三日にはオーストラリア軍が上陸し、ラバウルはオーストラリア軍の軍政下に置かれてしまった。しかし、たまたまオーストラリア軍の中には五年前まで小嶺とともに船長をしていたジャックソン予備役少佐がいたため、小嶺はオーストラリア軍に協力することとなり、通信所の建設工事など各種の仕事を依頼された。

一方、オーストラリア軍が警備上で特に問題としたのがドイツ砲艦コマット号(二五〇トン)の存在であった。小嶺は一〇月四日にコマット号がどこに秘んでいるかとジャックソン少佐に聞かれると、コマット号が隠れ得る港はニューギニアではルル港しかないという回答し、小嶺は直ちにジャックソン少

佐の小蒸気船ニュサ号に乗ってルルに向かった。

コメット号をニューブリテン島北西にあるタラシア湾で発見すると、小嶺は夜陰を利用して土民兵を率いコメット号に向かい、「ボート」を艦側に漕ぎ着けた。一人日本刀一振り、小脇に抱えて艦上に乗り移った。そして、艦長室に迫り、やにわに進入して寝入っていた艦長エルマン大佐を説得して捕獲し、率いて来た土民兵を指揮して「自らブリッジに立ち意気揚々とラバウルに凱旋」した。

凱旋後に小嶺から総督への贈呈式が行われたが、総督は小嶺のこの行為を喜び「小嶺ヲ主賓トシテ大宴会ヲ催シ日英万歳、小嶺万歳ヲ三唱シタ」という。そして、小嶺はこの功績により名誉陸軍大尉の称号と感謝状を与えられ、「総督ヲ除クホカ脱帽ノ敬礼ヲナス要ナシ」と達せられたという。

以上が小嶺商会の「戦時在住報告」および昭和一〇（一九三五）年七月二八日付の『サンデー毎日』が「昭和の山田長政―日本刀を掲げて単身独艦を生け捕る」と報じた小嶺のコメット号捕獲物語である。

その後、さらに小嶺は一月二〇日アドミラルティー諸島で農場視察の許可を得ると、総督から未だにアドミラルティー諸島の降伏手続きが終了していないので、ドイツの責任者から同島

の受渡しを受けるよう依頼された。そこで小嶺は汽船シャラ号で二三日にアドミラルティー諸島に向かい、逃げる総督を説得し庁舎及び書類の引き渡しを受け、総督を同道してラバウルに帰投した。

一方、一九一四年二月二八日に日本海軍の第一南遣支隊の巡洋艦筑波、矢萩、駆逐艦山風、海風が状況視察に入港すると、小嶺は司令官を訪問し食糧が欠乏していることを訴え、筑波から米一〇〇表、醤油五〇樽、矢萩から米五〇表、醤油二〇樽の支給を受け、さらに日本への連絡に必要なれば便乗を許すといわれたため、店員の鮫島三之助を補給船彼南（べなん）丸で、日本に送りラバウルの実情を報告させた。

三、歴史の真実

しかし、オーストラリアの第一次大戦の公式海軍戦史などによると、次のようなものであった。

オーストラリア軍がニューギニアを占領し、ドイツ総督は降伏したがコメット号は逃走して所在が不明であった。ラバウル港長に任命されたジャクソン海軍少佐は一月四日にコメット号がニューブリテン島の北岸に潜伏しているとの情報を得ると、ニュサ号に陸軍中佐バットン（その後少将となる）と歩兵一個小隊、イギリスの市民権を持つ現地人の通訳ホワイトマン、それに

小嶺を乗せて一〇月八日にシンプソン港を出港し、タラシア湾に向かい一〇日夕刻に沖合の島影に投錨した。

そして、小嶺の援助により原住民から正確な情報入手し、翌一日午前五時四五分に酋長を水先案内として船乗させて投錨し、コメット号の見張りに気づかれないように四〇〇ヤードに接近し、バットン中佐が一二名の兵隊と通訳のホワイトマンを率いボートでコメット号に乗船した。このとき艦長は髭剃り中で応戦の暇なく、士官五名と乗員五二名が降伏した。

一方、ニュサ号は臨検隊を派出後はコメット号の五〇ヤードに停泊し砲を構えて威圧した。「ニュサ号が不意に目前に現れたため、何ら準備できなかったコメット号は降伏の外なかったものの如くであった」とされている。

また、小嶺についてジャクソン少佐は「ラバウルの小嶺磯吉ニュサ船上にあり、コメット号の精確なる位置を知り得たるは彼の助力と土人に関する智識に負う所が多い。同氏は大なる冒険心を示し且つニュサ号はコメット号の砲撃に会う機会の在り得る事に就いては毫も意に介さざるものの如し。彼は吾人に助力する事に焦慮し、此討伐隊に伴なはれたため、タレレ群島沖に於いて難破船救助作業を実施中であつたが、それを中止して来援したものであつた」と報告している。

しかし、オーストラリアの海軍戦史はホワイトマンはコメット号を降伏させたのは自分であつたと主張しているが、ジャクソン少佐も死亡しているため確認できなかったと記している。なお、オーストラリア海軍戦史には小嶺が八月一日に二五馬力のボートをオーストラリア海軍に寄贈した記録があるので、この二五馬力のボートの寄贈が、二五〇トンのコメット号の寄贈となり、さらに話が大きくなってコメット号の生け捕り武勇伝となってしまうのであろうか。

（参考文献）

- 小嶺商会店員鮫島三之助「戦時在住状況報告書」『戦時書類』第二五巻
上条深志編『戦線一万五千里』（南洋群島文化協会、一九四一年）一八三～二〇二頁
Arthur W. Jose, *The Royal Australian Navy, 1914-1918* (Sydney: Angus & Robertson, 1937), pp. 120-121, p. 551.

〔平間 洋一〕